

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第3号 2017年8月1日

# 大学生に対するリズム指導の試み<sup>†</sup>

## —付点音符を中心として—

新井 恵美\*

宇都宮大学教育学部\*

本稿は、本学部開講科目である「音楽A」において実施した、初歩のソルフェージュの内容のうち、リズム指導の、中でも学生が苦手としている付点音符を含むリズムの指導に関する論文である。様々な方法を試みた結果、付点音符を構造分解し、最も単純な形にして、視認させることが効果的であることがわかった。本稿の検証は、小・中学生へのリズム指導にも応用が可能である。

キーワード：リズム、付点音符、リズム指導

### 1. はじめに

筆者は、本学着任時より小学校教科専門科目を担当している。途中、カリキュラムの変更により、当該科目の必修部分は通年から半期へと短縮したことから、授業内容の精選を何度か行ってきたものの、音高や音価などの、小・中学校で学習してきた初歩の楽典やソルフェージュは欠かさず取り扱っている。それは、小・中学校の音楽科で学習してきた内容が学生に必ずしも定着していないこと、高等学校芸術科において音楽を選択していないことにより、これまで学習してきた内容を忘れてしまったことなどの要因があるためであると考えた。

小学校の教員として、音楽科の授業を担当するには、楽譜が読め、それを音にすることができるようになることを求められる。そのためには、楽譜上の音高と音価を正確に把握できるようになることが重要となる。音高の変化によって形成される旋律の中には、当然リズムの要素も包含されることから、まずはリズム、すなわち音価を正確に把握することが必要である。

以上のことから、授業の中で、リズム譜を見て手拍子を打つ、いわゆるリズム打ちの活動を取り入

れている。全15回のうちの3回程度、90分の授業の前半部分で行っているが、その際、付点音符が含まれるリズムが出てきたときに、止まってしまう学生が多く見受けられる。

筆者は、学校教育教員養成課程の学生に必修科目として設定している小学校教科専門科目の「音楽A」という授業を担当しており、その中では、前述した初歩の楽典やソルフェージュに加え、小学校で取り扱うことの多い様々な打楽器の使用法、鍵盤ハーモニカやリコーダーの実技を行っている。学生の知識や技能を向上させるだけでなく、子どもが難しいと考える部分はどこにあるか、それを解決するにはどのような手立てが必要かを考える時間を設定している。しかしながら、15回しかない授業の中で、小学校で指導するすべての内容を修得し、自信を持って教壇に立てるレベルまで引き上げられるのは非常に困難である。そのため、学生には、単位修得後も各自で問題意識を持ち、深めていくためのヒントを提示するようにしている。

本授業の中で、学生が最も困難さを感じている内容は、拍子の理解と付点音符のリズムである。筆者は、授業時に毎回リアクションペーパーの提出をさせ、それらに全てコメントを付して返却しているが、この内容を取り扱うときには、6割以上の学生が難しさを感じている内容の感想を寄せてくるという現状がある。

本稿では、その付点音符が含まれるリズムを、少ない授業時数の中で大学生にどのように理解させる

<sup>†</sup> Emi ARAI\*: Attempt to Teach Rhythm to University Students

Keywords : Rhythm, Dotted Note, Rhythm Instruction

\* School of Education, Utsunomiya University  
(連絡先 : [arai@cc.utsunomiya-u.ac.jp](mailto:arai@cc.utsunomiya-u.ac.jp))

ると考える。

## 2. 音楽科授業実践におけるリズム認知の重要性

リズムは、さまざまな音価の音符や休符の組み合わせによって生まれる。そのため、指導は音符や休符の種類と、それらの相対的な音価の違いについて理解させることから始まる。それらを理解した上で、音符や休符が拍子という秩序の中で並べられ、音楽の上での時間の単位となる、拍として数えられる音符がどれになるのかを把握し、その拍に乗ったリズムを打つことが可能となる。

音楽科の授業実践においては、教師が楽曲のリズムを把握できるようになっていることが大変重要である。小学校で取り扱う音楽のほとんどにはリズムの要素が含まれており、それらを教師が範唱、範奏したり、鑑賞において楽曲の特徴的なリズムをポイントとして示すことも少なくない。音楽づくりの活動でもリズムパターンを選んでそれを組み合わせる活動が提示されており、これらを教師が正確に把握できるようにしておくことは不可欠である。

### 3. 付点音符の記述について

「楽典」と称される数々の著書を参照すると、付点音符とは、点の付いている音符とその半分の長さを足した長さを表す、といった内容に集約される。小学校で学習する付点音符の種類は、付点二分音符、付点四分音符、付点八分音符の3種類であるから、それぞれ、二分音符+四分音符、四分音符+八分音符、八分音符+十六分音符の長さを持つ音符ということになる。

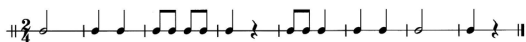
筆者が「音楽A」の授業で使用しているテキストには、「ほとんどの場合、次のように他の音符と組み合わせてきりのよい長さにして使います」<sup>1</sup>と述べ、付点二分音符は四分音符と、付点四分音符は八分音符と、付点八分音符は十六分音符と組み合わせることを提示した上で、「ここにあげた組み合わせの例は、基本の形です。時には2つの音符の並び方が逆になったり、あるいは音符のかわりに休符が入るなど、いろいろな形で出てきます。基本の組み合わせの長さの関係をしっかり覚えておけば、どんな形が出てきても応用ができます。」<sup>2</sup>としている。当然、例外はあるものの、小学校で指導を行おうとしている学生にとっては非常にわかりやすい記述であ

#### 4. リズム打ちの実践

2で述べたように、リズムを知識として理解しておくことは重要なことではあるが、そのリズムが音として表現できなければ、真に理解したということとはできない。そこまでできるようになって初めて、リズム認知が可能となったといえるのではなかろうか。そこで、以下のような実践を行った。

3で示した内容を授業で扱い、まずは頭で理解した後、それを感覚としてつなげるためにリズム打ちをするという形をとった。初めは、リズム打ちそのものに慣れてもらうために、譜例1のような、付点音符のないリズム譜から行う。学生がリズム打ちをする際には、筆者がガイドとしてピアノを弾いている。小節の切り替わりが認識できるように、譜例1のような8小節の場合は「C→F→D<sub>7</sub>→G→C<sub>7</sub>→F→G<sub>7</sub>→C」のように、1小節ごとにコードを変え、右手で楽譜のリズムを、左手で拍を示すように弾いている。これに慣れてきたら、ピアノはリズムを弾かず、拍のみをコードで弾いていく。

譜例 1<sup>3</sup>



譜例1は、全員の学生がほぼ間違いなくリズム打ちを行うことができる。小学校で取り扱うこととされている拍子は譜例1の4分の2拍子の他、4分の3拍子、4分の4拍子、8分の6拍子の4種類があるため、これらの拍子でできたりズム譜で、付点音符のないものをいくつか全員で行った後、いよいよ付点音符の含まれたリズムへ移る。その初めに行うのが、譜例2である。

譜例 2<sup>4</sup>



この譜例2の場合、5小節目でわからなくなってしまう学生が多くみられる。これは、付点八分音符と十六分音符の組み合わせが出てきたときも同様である。かつては、個人練習の時間に筆者が机間指導する中で、できない部分を範奏し、模倣させることで解決していた。しかしながら、これではその場しのぎでしかなく、何の解決にもならないことがわ

かった。なぜなら、学生は、筆者の範奏を聴いて覚えてしまい、それを楽譜と関連付けて理解しようとしていなかったからである。その場ではできるようになっても、別のリズム譜に移ると、同じ形のリズムであるにもかかわらず手拍子を打つことができず、また一から机間指導をすることになってしまう。学生は小学生の頃から、範唱や範奏を聴いて歌唱や器楽の活動をすることに慣れているため、聴き覚えはすぐにできてしまうためと考える。これでは結局、学生の理解を深めることはできないことから、なんとかして楽譜と直結して理解させることはできないかと、いくつかの方法を試行してみた。

#### (1) 長さの数値を記入

リズム譜の音符の下に、その音符が、当該拍子の中で何拍分に相当するかの数字を記入させてみた。例えば、譜例2の5小節目は、「1.5、0.5、1」となる。この方法で理解できた学生もいたが、全員がこれで理解できたとはいえなかった。

#### (2) スキップ

特に、付点八分音符と十六分音符の組み合わせは、スキップリズムとも呼ばれることから、実際にスキップをさせてみた。しかしながら、これはうまくいかなかった。学生は、スキップはできるものの、足の動きがリズムとして頭で認識できないようであった。したがって、楽譜とつなげて理解することも、当然できなかった。

#### (3) リズムに言葉を当てはめる

リズムに言葉を当てはめて口で言うという方法は、小学校でもよく採用されている。付点音符を伴うリズムではないが、譜例3のような、シンコペーションのリズムも、学生はあまり得意としない。これについて「ヒコーキ（飛行機）」や「ステーキ」などの言葉を当てはめて、口で言いながら手拍子をさせてみたところ、かなり正確にリズム打ちをできるようになった。シンコペーションにおいては、この方法は大変有効であった。

#### 譜例3



これを応用して、付点音符を含むリズムでやってみることにした。授業の中で、学生からリズムに合いそうな言葉を募ってやってみた。付点四分音符と八分音符、付点八分音符と十六分音符の組み合わせは、4分割の3対1であるが、学生から出てくる言葉はどれも「ケーキ」のような3拍分のものばかりで、ともすれば三連符の2対1のようになってしまい、付点音符を含むリズムに関しては、この方法はうまくいかなかった。

#### (4) 音符を単純化する

楽譜を読むことに慣れていない学生は、付点音符の点がどの音符に相当するかを瞬時に判断できないのではないかと推測し、これを視覚的にとらえやすくする工夫を施した。譜例4の場合、まず譜例5のように構造を分解し、もっとも単純化したものを用いてリズム打ちをさせた。これは学生にとっては自信を持ってできるリズムである。次は譜例6で示したように、構造を分解した付点四分音符の四分音符と八分音符をタイでつなぐリズムを提示し、リズム打ちをさせた。こうすると、学生は難なく実践することができた。これは譜例4と同じリズムであるので、それを伝えて別のリズム譜に移ると、筆者が手取り足取り教えなくても、各自で自信を持ってできるようになっていった。

#### 譜例4



#### 譜例5

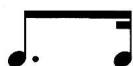


#### 譜例6



付点八分音符と十六分音符の組み合わせの場合も、同じように譜例7～9として指導したところ、ほとんどの学生が自信を持ってリズム打ちできるようになった。

譜例7



譜例8



譜例9



#### 4. むすび

さまざまな方法を実践してみた結果、3の(4)の方法が、学生にとって、楽譜上の理解と感覚が直結しやすい方法であることがわかった。既習の、しかも学生が確実に理解しているものへ単純化することが有効である。これが理解できるようになり、打楽器や鍵盤ハーモニカ、リコーダーの実技をするなかで以前より速く楽譜の理解ができるようになったという感想がみられたり、筆者が授業開始時に教室へはいると、そこで自主的にリズム打ちをしている学生を見ることができるようになったりした。これは成果といってよい。この、既習の音符へ単純化するという方法は、大学生のみならず、小・中学生にも有効に働くであろう。

本稿では、付点音符を含むリズム打ちを、なるべく少ない時間で学生に理解・定着させる方法について考察した。本実践を行っても、学生がどうしても苦手とするものがまだ存在する。本実践により、学生がほぼ迷うことなくリズム打ちできる拍子は、4分の2拍子、4分の3拍子、4分の4拍子である。もう一つの、8分の6拍子はリズム云々ではなく、苦手とする学生が多いのである。これは、1拍とする音符の種類が異なることに起因すると考える。また、8分の6拍子の楽曲は学生もそれほど触れてきておらず、また、触れていたとしても聴き覚えで演奏しているために、楽譜との直結がスムーズでないことも考えられる。リズム打ちなど、8分の6拍子を扱う量を増やして慣れさせるのがよい方法であろうが、なかなか難しい。この点については、今後の課題としたい。

また、リズム打ちを実践していく中で、学生は拍そのものに意識を向けていないのではないかと思います。

れた。学生に「普段聴いている音楽で、拍を意識しながら聴くことはあるか」という質問をしたところ、約40名のクラスで、挙手するのは2～3名である。例えば、譜例4のリズムは、4分のn拍子において、1拍目と2拍目の裏を手拍子することになる。譜例5のリズムは、必ず拍の頭に手拍子を打つことになっており、これであれば拍をあまり意識していなくてもリズム打ちをすることができる。しかしながら、譜例4のリズムは、楽曲の拍を十分に認識していなければリズム打ちしにくいものであり、学生のリズム打ちの実技からも、楽曲の演奏や鑑賞において拍を意識していないことが明らかになった。拍は、その楽曲の時間の単位となる重要なもので、これが意識できなければ、そこに乘せたリズムを認識することは容易ではない。授業中の様々な活動の中で、拍を意識できるような場を設定することも課題となると考える。

現状では、リズム打ちを実施する機会は、3回程度であるが、より定着させるためには、短い時間であっても回数を増やし、継続的に指導することも重要であろう。そのような改善を図り、再び定着について検証したいと考える。

「できた」という達成感がその後の意欲を生み出すことは多い。単位修得後の学生の自主的な学習のヒントとなるような方法を今後も研究していきたい。また、そのような方法を増やすことにより、授業の中で扱える内容が少しずつ増えていくことを目指したい。そして、学生が教壇に立って自信を持って音楽科の授業を行い、生き生きとした活動が生み出されることを期待して本稿を閉じることにする。

#### 注

- 1 五代香蘭『楽譜が読めると 音楽がおもしろい』改訂版、2012、p.19 (メトロポリタンプレス)
- 2 前掲注1、p.20
- 3 桐朋学園音楽部門編『ソルフェージュ教育ライブラリー 基礎ソルフェージュ 初心者のための視唱課題集 (リズム練習・手拍子付き)』、2006、p.6-d (音楽之友社)
- 4 前掲注3、p.17-b

#### 参考文献

菊池有恒『楽典 音楽を志す人のための』新版、音楽之友社、1988

『いちばんやさしい 楽典入門』、オンキョウパブリッシュ、1998

カワイ音楽教育研究所編『知っておきたい おとなのための音楽知識』、カワイ出版、2002

桐朋学園音楽部門編『ソルフエージュ教育ライブラリー 基礎ソルフエージュ 初心者のための視唱課題集（リズム練習・手拍子付き）』、音楽之友社、2006

長沼由美、二藤宏美『読んでわかる！ きいてわかる！ 楽譜の読み方 大人の楽典入門』ヤマハミュージックメディア、2006

木下牧子監修『よくわかる楽典』、ナツメ社、2008

飛田君夫編『よくわかる やくにたつ ザ・楽典』、第35版、ヤマハミュージックメディア、2010

五代香蘭『楽譜が読めると 音楽がおもしろい』改訂版、メトロポリタンプレス2012

五代香蘭『基礎から鍛えてリズム感アップ！ とにかくリズムがとれない人のための本 リズムにノッてどこまでも』、ケイ・エム・ピー、2015

平成29年3月31日 受理